

松村神父の勝手に独り言

2020年4月10日 聖金曜日に向けて

2020年の聖金曜日に「主の受難のみ言葉の祭儀」を皆さんと共に過ごすことができないのは残念ですが、ただこの日は、私たちは「み言葉の祭儀」に習慣的に参加するよりも、一人一人が今だからこそ【積極的】に家で、静かに主の受難を思い起こし、大齋・小齋を過ごすことができるというのは逆に良い環境に置かれていると考えることもできます。ポジティブに受け取っていきましょう。

さて、ちなみに大齋・小齋は以前にもお話ししましたが、食事の節制・制限と肉の無摂取ですが、それ以上に忍耐をもって過ごすということです。私は大齋・小齋以外に、大好きなコーヒーを忍耐します！と宣言しておきましょう。守れるようお祈りください。ただ単純に節制をするだけではなく、心も受難とキリストの忍耐に向けて祈り、考え、過ごすことをしていきたいと思っています。そこで、心から何をお捧げできるのかを考えました。それはこの四旬節でも私自身の働きの中にあります。そこから何かヒントを受け取ってもらえればと思います。

香里教会はこの時期に皆さんが来れないということで、主人のいない家のように寂しくなっています。しかし、より皆さんが集まった姿を想像し、いつもよりも皆さんを認識する機会となりました。「鬱陶しいけど、いないとそれはそれで寂しい」「親孝行、したいときには親は無し」という感覚に似たものがあります。やはり、皆さんは教会に必要な存在、主人公なのです。そう感じたたん、私は、皆さんに会えない間も一人として被害を出さないために祈り、健康を保持するためにどのように教会を運営するかに没頭した1カ月半となりました。これほど皆さんのことを考えたことはなかったかもしれない(ごめんなさい)。教区の発信をただ待つのではなく、情報入手し、社会の在り方をよく見て、昨年教皇訪日の『PROTECT ALL LIFE～すべてのいのちを守る～』の実現を願い、不安にさせないよう一歩でも早くネットや印刷物を通して皆さんと対話の努力をしてきました。そして同時に皆さんも頭の中で教会に赴き、ミサや祈り、聖体拝領や赦しの秘跡に渴望し始めてきたのではないのでしょうか。会えない寂しさ、関われない苦しさ、恵みを受けられない悲しさ。教会に来ることができない病人や高齢者、排除された人々の気持ちに、私たちは近づいたのかもしれませんが。でもまたいつかこの感覚は忘れ去られる時が来ます。今回のコロナウイルスの一連の騒動は、社会的な危機としてだけではなく、私たちの信仰を考え直す大切な一助になっているのです。そして、イエス・キリストが人類の罪のために十字架にかかり、死ぬことを通して大切なことを私たちに残されました。その本質を私たちは、このコロナの出来事を通して、忘れぬ出来事として心に刻み、信仰を生きるための出来事として残していきたいと思っています。

教会に足を向けることの喜び、同じ信仰者に会える喜び、ミサ(聖体の拝領)のありがたみ、奉仕できる喜び。今まで面倒な役割や当番への不満を持つ心に光が投げられたのではないのでしょうか。そして教会と情報が繋がっていることで、不安からの脱出。コロナが悪いことを与えただけではなく、改めて私たちに信仰生活の喜びを感じさせられたと前向きにとらえる必要があると感じます。

四旬節と聖週間の公開ミサの中止は日本だけではなく世界の歴史上珍しいことで、歴史に名を遺す“2020年”であると捉えられる感性は非常に大切なのです。だからこそ各自として“苦しみの意味”をしっかり考える必要があります。日本においても戦争の傷、各年代の大震災に続き、教会はコロナをも引き受け、それも“イエスの受難”を理解する良いきっかけにしようとしています。それはイエスが“悪しき十字架”という迫害を“栄光の木”へと変えられた神秘(聖金曜日の祈り)に通じています。マザーテレサの祈りのように、苦しみの出来事を“憎しみではなく愛”で実現することが求められています。だからこそ、今信仰の目でコロナの苦しみをすら引き受けていくことが大切と思ひながら、祈りと人と人の繋がりを今こそ生きていきたいものです。

ミサや集いが“できる”“できない”、“すべき”“すべきでない”、他では“している”“していない”など、全国のカトリック信者の中でも賛否を問いかける動きがあります。教皇やある司教は、「今は裁きの時ではない。」「見極めが必要」「隣人愛はいのちを守る」を精一杯行うことを今は信じ、私たちは律法学者のような評論家としてではなく、この大きな壁を節制と忍耐の内に祈り乗り越えていきたいものです。

.....という独り言でした。